

中部の

エネルギーを 築いた

人々

養老鉄道、揖斐川電力の創設者

立川勇次郎

立川勇次郎は、1862(文久2)年、美濃国大垣藩士、清水垣右衛門の二男に生れ、1881(明治14)年、同藩藩士立川清助の養子となった。早くから法律を学び、弱冠にして現在の弁護士である代言人の資格を得た。当初、名古屋で法律事務所を開いたが、1889(明治22)年に上京し、明治維新以降、産業社会の近代化が進む中、時代の趨勢を洞察し法曹界から転じて実業家の道を歩むことを決意した。その後、電気鉄道、電気機器、電気事業など時代を先行する数多くの会社を創設した。

今月号は、日本の電鉄・電力事業の先駆者の一人として、また、故郷の大垣において養老鉄道、揖斐川電力を設立し、岐阜県西濃地方の工業化に多く貢献した立川勇次郎を紹介する。



立川勇次郎(1862~1925)
「出典：イビデン70年史」

電気鉄道、電気機器会社の設立

(1) 東京市街鉄道会社の設立

立川は、1889(明治22)年、首都の大量高速輸送の開設のため東京電気鉄道の鉄道敷設免許を出願したが却下され、また1893(明治26)年に雨宮敬次郎らの協力を得て申請したが許可されなかった。その後、東京市街鉄道と改称のうえ再出願し許可を得て、1903(明治36)年に数寄屋橋～日比谷～大手町～神田橋間を開業し、常務取締役役に就任した。この時、画期的な乗車賃均一料金制度を採用した。

(2) 東京白熱電灯の経営に参画

立川は、1898(明治31)年3月以降、東京白熱電灯(後の東京芝浦電気)の取締役に就任し、藤岡市助博士らと共に電球、電気機器の製造普及に努めた。

(3) 大師鉄道の設立・川崎大師駅前に「電気鉄道発祥の地」の碑

立川は、1899(明治32)年、大師鉄道の専務取締役に就任し、明治37年に当時の川崎

駅(後の六郷橋駅)～大師駅(現在の川崎大師駅)間の2*キロメートルを開業した。この大師鉄道は、後に川崎電気鉄道、京浜電気鉄道と改名し、東京～横浜間を結ぶ日本で最初の都市間輸送の電鉄となった。現在、川崎大師駅前に機関車の車輪を模した「電気鉄道発祥の地」とする立川勇次郎の顕彰碑が建っている。このほか、東京～大阪間に高速電鉄の構想など新機軸を打ち出した。

(4) 養老鉄道株式会社設立

1911(明治44)年、養老鉄道(資本金:150万円)を設立し取締役社長に就任し、線路用地の買収に着手した。大正2年に池野～養老間(24.7*キロメートル)の営業を始め、1919(大正8)年までに桑名～養老～大垣～池野～揖斐間(57.5*キロメートル)を開通した。当時、揖斐川電気株式会社の社長であった立川は、1922(大正11)年に同社を合併し、翌年全線電化を完工させた。

揖斐川電力(株)の設立

揖斐川電力は、地元大垣の発展を願う人達の要請により1911(大正元)年、資本金100万円で創業され、立川が社長に就任した。ここに交通至便で広大な土地と豊富な地下水に恵まれた大垣に大企業が誕生し、西横山発電所(出力:3,900kW)の建設に着工した。当時、第1次世界大戦が勃発する情勢下において、工事資金の調達に苦労したが、1916(大正5)年に完工した。翌年から余剰電力を利用するためカーバイドとフェロアロイなど合金鉄製造の兼営事業を開始した。

1918(大正7)年、揖斐川電化工業、東海電化工業、日本電気製鉄所の3社が合併し、揖斐川電化(株)に社名変更した。しかし、第1次世

界大戦が終り戦後の反動不況のためフェロアロイと電気製鉄の操業を停止した。そして1921(大正10)、揖斐川電気(株)に社名変更した。同年、東横山発電所(出力:12,000kW)が完成した。この発電所の水車については、当初4台をスイス・エッシャウイス社製にしていたが、第一次世界大戦の影響で、2台を先に西横山発電所で採用した電業社の縦軸水車に変更した。また、出力については、供給開始時(大正10年6月)には6,400kWであったが、残存工事の完成により同年7月8,000kW、さらに12月最大電力12,000kWになった。その後も引き続き広瀬発電所、川上発電所、西平発電所を建設した。

5発電所の概要

発電所名	出力	水車	発電機	竣工年
西横山発電所	3,900	1,119kW X4 縦軸フランス形 電業社製	1,250kv AX4 縦軸回転界磁形 GE社製	1916(大正5)
東横山発電所	12,000	3,730kW X4 縦軸フランス形 電業社製 X2 エッシャウイス社製 X2	縦軸回転界磁形 GE社製 4,000kv AX4	1921(大正10)
広瀬発電所	5,200	3,133kW X2 縦軸フランス形	縦軸回転界磁形 芝浦製作所社製 3,500kv AX2	1925(大正14)
	(増設)6,500	電業社製 X2		1940(昭和15)
川上発電所	2,950	3,200kW X1 (フランス形横軸)	3,750kv AX1 (横軸)	1935(昭和10)
	(増設)3,500			1940(昭和15)
西平発電所	11,200	6,000kW X2 (カプラン形縦軸)	6,500kv AX2 (縦軸)	1940(昭和15)



東横山発電所の概観

このように西濃地方の産業発展に尽力する中、1925(大正14)年、外遊中に得た病が癒えず東京で亡くなった。立川の死を悼み、1927(昭和2)年、その功績をたたえて養老駅前に巨岩の顕彰碑が建てられた。

なお、略歴と碑文は次のとおりである。

立川勇次郎の略歴(1862～1925)

1862	文久2	大垣藩士、清水垣右衛門の二男として誕生
1881	明治14	大垣藩士、立川清助の養子となる
1895	明治28	養老鉄道敷設願書を提出
1898	明治31	東京白熱電灯製造(株)取締役就任(後の東京芝浦電気)
1899	明治32	大師鉄道(株)専務取締役就任(後の川崎電気鉄道—京浜電気鉄道)
1903	明治36	東京市街鉄道会社常務取締役就任
1911	明治44	養老鉄道(株)を設立し社長に就任(資本金：150万円)
1911	大正元	揖斐川電力(株)を設立(資本金：100万円)
1916	大正5	西横山発電所(出力：3,900kW)完成
1917	大正6	揖斐川電化工業(株)を設立し社長に就任(資本金：300万円)
1918	大正7	揖斐川電化工業・東海電化工業、日本電気製鉄所の3社を合併し揖斐川電化株式会社と社名変更
1921	大正10	揖斐川電気株式会社と社名変更、東横山発電所(出力：12,000kW)完成
1922	大正11	揖斐川電気(株)は養老鉄道(株)を合併
1923	大正12	養老鉄道全線電化工事を完工
1925	大正14	広瀬発電所(出力：5,200kW)完成、立川勇次郎逝去
1926	大正15	東邦電力の傘下に入る
1935	昭和10	川上発電所(出力：2,950kW)完成
1940	昭和15	揖斐川電気工業株式会社に社名変更、西平発電所(出力：11,200kW)完成
1982	昭和57	イビデン株式会社に社名変更

立川勇次郎の碑(碑文)

君文久2年2月20日を以て大垣に生る。藩士 清水垣右衛門君の第二子、後同藩士立川清助君の嗣となる。君、幼にして穎悟、成童より育英の事に従い傍ら法律の学を修め、弱冠にして弁護士試験に登第、明治19年業を東京に開き頗る令名あり。夙に時運の大勢を洞察し、翻然決意、身を電気業界に投じ、同32年京浜電気鉄道会社を創設す。

実に関東における電気鉄道の嚆矢たり、ついで東京電力会社を起し水力電気事業に先鞭をつけ、又照明の忽せにすべらかざるを察し、同志と共に東京電気会社を組織して、電球の製造に一生面を開き、或は支那に対する電気企業の必要に着目して支那興業会社を創立し、或は電気博覧会を開催して電気知識と応用との普及を図り、或は日米両国電気企業家提携の緊切なるを覚り老軀を挺して米国に航し、四方に勧説して陰に国交に裨補せるが如き斯界の開発進展に努力せること枚挙に遑あらず。就中兩宮計治朗と力を協せ、東京市街鉄道会社を創立し紛紛たる群議を排して乗車賃金3銭均一論を提唱し、所謂均一制度を確立せるが如きはけだし我国交通史上に特筆すべき偉績たり。

さらに東京大阪間に高速電気鉄道を企画し交通上に新機軸を出さんとし、明治40年以來十年一日の如くその達成を期して止まず、亦以て君の志の遠大なるを知るべし。晩年郷里に養老鉄道会社を創設し、後揖斐川電気会社を經營するや其の動力を電気に改め、又大阪への送電を執行して長距離送電の濫觴を為し、志業ほぼなるに垂んとして大正14年12月14日病を以て東京に没す。

君、資性剛毅花壇、事に当たりて惑わず、一路所信に直往し毀譽得喪毫も意に介せず、活眼時勢の趨嚮を觀、企画、概ね一世に先ず其の事に従うや精励、その人に接するや和沢、後進の誘掖を受くる者、皆、其の徳に服せざる莫し。君忙裏、閑あれば即ち園芸謡曲に悠遊せるが如き又以て其の為人となりを想見すべし。今や君逝きて三年、君を追慕する胥謀りて君が事功行状の梗概を叙し、碑に勒して養老山麓に建て以て後昆に伝ふと。云爾。

伯爵 戸田氏共篆額

昭和2年12月14日

文学博士 南条文雄撰文

百鍊 大野鐵書

西濃地方における電気事業

1907(明治40)年、岐阜電気株が設立され、揖斐川支流粕川に小宮神水力発電所(出力：300kW)を建設し、翌年、大垣市の中心地に送電した。その後、揖斐川電力、村営電気事業者、小規模電気事業者などにより1921(大正10)年頃までには西濃全域に電気が点灯した。営業区域の大半は、岐阜電気を経て東邦電力から供給されたが、ここでは揖斐川電力と村営電気事業者などの足跡を述べる。



旧西横山発電所の水車

た水車・発電機・调速機一式がある。

この水車は、当初、ドイツのフォイト社に発注されたが第1次世界大戦が勃発し輸入できなくなり、急遽日本の電業社に変更された。イビデン70年史には「東京電業社が我が国において比較的この途に長ぜるを認め遂に水車の製作を命じたり。然れども全然信を置きたるにあらず、……しかるに当社技師の周密なる注意と、電業社の熱誠なる努力により遂に困難と称せられる縦軸水車と调速機は厳格かつ精細なる試験の結果、これが完全無欠を証明し、今や米国製の発電機を運転し、日夜無事送電するを得たるは我が社の以て幸福たるのみならず、斯くの如き機の内地において玉製せらるるに至れるは邦家のため祝福すべきことなりとす。」と記されている。まさに我が国初の国産縦軸水車で、電力技術史上記念すべき産業遺産として保管展示されている。

(1) 揖斐川電力

ア 揖斐川電力の変遷

揖斐川電力(1911年)は、前述のように揖斐川電化工業(1917年)、揖斐川電化(1918)、揖斐川電気(1921)、揖斐川電気工業(1940年)、イビデン(1982年)株式会社と社名を変更し、現在にいたっている。

揖斐川電気の大正末期における電灯需要の供給は、藤橋・久瀬・坂内の3村であった。一方電力需要は、宇治川電気に5,000kWを送電し関西方面に、また、西濃地方の大口需要家に供給した。

1942(昭和17)年、電力管理法施行令に基づき西平発電所を日本発送電に、配電統制令に基づき西横山発電所を中部配電に承継され、電気供給事業を廃止した。そして揖斐川電気工業は川上・広瀬・東横山の3発電所を自家用発電所として、電気化学工業に主体をおく会社となった。

イ 旧西横山発電所の産業遺産

岐阜県揖斐川町藤橋(旧藤橋村)の入口に「道の駅 星のふる里藤橋」がある。この構内に1964(昭和39)年、横山ダム建設によって水没した西横山発電所で使われてい

(2) 村営電気事業者・小規模電気事業者

村営や小規模電気事業者に関する記録は少ないので、断片的、羅列的に順次紹介する。

- ① 大垣瓦斯電気—1912(明治45)年、大垣市内のガス供給のため大垣瓦斯として設立、1917(大正6)年に墨俣電気を吸



収して電気供給事業を兼営したので大垣瓦斯電気と改名した。1939(昭和14)年に電気事業部門を東邦電力に譲渡した。

- ② 墨俣電気—1915(大正4)年に設立、出力30kWの変電所で受電し、墨俣村に供給していたが、1917(大正6)年、大垣瓦斯電気に合併された。
- ③ 坂内電灯—1918(大正7)年に設立、坂内村に供給されたが、1925(大正14)年に揖斐川電気に統合された。
- ④ 時水力発電—1921(大正10)年に発電所が完工し、供給を始めたが、翌年、関西電力を経て東邦電力に合併された。
- ⑤ 市場水力電気—1921(大正10)年、揖斐郡小島村の地元有力者が電気会社を設立、出力25kWの水力発電所を建設し供給したが、1939(昭和14)年に東邦電

力の供給区域となった。

- ⑥ 宮地村営電気—1921(大正10)年、出力10kWの水力発電所を建設し村内に供給したが、1943(昭和18)年、中部配電に統合された。
- ⑦ 府中村営電気—府中村の梅谷川に17kWの水力発電所が1921(大正10)年に建設されたが、1940(昭和15)年、東邦電力に統合された。
- ⑧ 牧田村営電気—1921(大正10)年、12kWの発電所を建設、1943(昭和18)年、中部配電に統合された。
- ⑨ 長瀬村営電気—1921(大正10)年、出力20kWの発電所を建設、1943(昭和18)年、中部配電に統合された。

(寺沢 安正)